

病理診断部

1. スタッフ (2019年4月1日現在)

| | |
|----------|-----------|
| 部長(教授) | 福嶋 敬宜 |
| 副部長(准教授) | 大城 久 |
| 医員(教授) | 仁木 利郎(兼務) |
| | 田中 亨(兼務) |
| (准教授) | 松原 大祐(兼務) |
| (講師) | 河田 浩敏(兼務) |
| (学内講師) | 仲矢 丈雄(兼務) |
| (助教) | 天野 雄介(兼務) |
| (助教) | 木原 淳(兼務) |
| (助教) | 廣田 由佳(兼務) |

| | |
|----------|--------------|
| シニアレジデント | 3名 |
| 非常勤医員 | 2名 |
| 技師(副技師長) | 芳賀 美子(兼務) |
| (主任) | 鈴木 智子(兼務) |
| (主任) | 本望 一昌(兼務) |
| (主任) | 二階堂貴章(兼務) |
| ほか、技師 | 12名、事務員 2.5名 |

2. 病理診断部の特徴

病理診断部は、自治医科大学附属病院の中央施設部門に属し、自治医科大学附属病院および一部さいたま医療センター(腎生検の電子顕微鏡検索用検体)で採取された検体について生検診断、細胞診断、術中迅速診断、外科切除検体の病理診断、および剖検診断などを行っている。

病理診断部では、提出されたすべての検体について病理医による適正な標本処理、必要十分な切り出し、病理検査技師による質の高い標本作製を行い、最終的に病理診断専門医による顕微鏡標本の観察、ダブルチェック過程を経て病理診断報告(電子カルテ上)を行っている。

また、必要に応じて免疫組織化学的検索、蛍光抗体法、電子顕微鏡検索、PCR解析を行い、複数の病理医による相互チェックを経て病理診断報告書を作成している。

診療における病理診断の関与が特に大きい呼吸器、消化管、肝臓、膵胆道、乳腺、口腔・耳鼻科系などを中心に、臨床病理合同カンファレンスを行う他、卒後臨床研修センターに協力して共同で病院CPC(年3回)を行うなど、病院の診療レベルの向上に寄与している。

病理診断部は、医学部教育の一部も担当し、臨床病理カンファレンス(CPC)(M4)全15回を行い、必修BSL(M4)、選択必修BSL(M5、M6)の学生も受け入れている。

また、消化器内科からの希望で、医師1名を週1日、病理診断研修のために受け入れている。

さらに、各科の研究支援の一環として、病理パラフィンブロックや組織スライドガラス標本の貸し出しや管理を行っている。

・施設認定:

日本病理学会認定施設
臨床細胞学会認定施設

・認定医

日本病理学会専門医: 福嶋 敬宜 ほか7名
(内、口腔病理専門医2名)
臨床細胞学会専門医: 福嶋 敬宜 ほか6名

3. 実績・クリニカルインディケーター

1) 病理診断件数の動向:

平成30年における組織診断は15,304件、細胞診は16,318件、術中迅速組織診断は933件、電顕285件、剖検診断は26件で、昨年に比べ組織診断件数が微増し、剖検が前年に比べ14件減少している。剖検数は、医療安全や後の当院の各専攻医の確保にも関わってくることから、病理診断部の課題というより、その維持については、引き続き病院全体の課題と捉えるべきである。免疫組織化学検査件数は、最近、ほぼ直線的に増加してきている(2013年2,081件→2018年3,341件。5年前の160%の件数となっている)。細胞診は、その内訳を見ると、婦人科、泌尿器科からの検体がやや減少傾向にある。昨年、急速に増加した体腔液検体(2016年1,871件→2017年2,355件→2018年2,388件)は、概ね横ばいとなった。消化器は、昨年急激に増加し、今年は少し減少したが(2016年409件→2017年801件→2018年763件)、EUS-FNA件数の増加傾向は依然続いている(2016年109件→2017年118件→2018年131件)。これは近年の保険収載などによる影響と考えられる。また、セルブロック検体の増加(2016年125件→2017年140件→2018年211件)も同様の理由と考えられる。

2) 部門統計(2018年)

| | |
|----------------|----------|
| ■病理組織診断件数: | 15,304件 |
| 生検 | 11,023件 |
| 内視鏡 | 4,255件 |
| 手術 | 3,624件 |
| 借用 | 426件 |
| 標本ブロック数 | 65,594個 |
| ヘマトキシリン・エオジン標本 | 133,248枚 |

| | |
|--------------------|------------------|
| 組織化学染色 | 29,653枚 |
| ■迅速診断： | 933件 |
| ブロック（検体）数 | 1,708個 |
| ■細胞診件数： | 16,318件, 38,906枚 |
| パパニコロー染色 | 32,519枚 |
| 特殊染色 | 5,999枚 |
| 〈検体別の件数〉 | |
| 婦人科関連 | 8,452件 |
| 呼吸器 | 1,443件 |
| 泌尿器 | 2,092件 |
| 甲状腺 | 306件 |
| 乳腺 | 241件 |
| 消化器 | 763件 |
| リンパ節 | 265件 |
| 体腔液 | 2,388件 |
| 他 | 368件 |
| セルブロック | 211件 |
| ■電子顕微鏡検索： | 285件 |
| （本院 196件、さいたま 89件） | |
| ■免疫組織化学染色： | 3,341件 |
| Her2蛋白検査件数： | 533件 |
| ER&PR： | 533件 |
| ■蛍光抗体法検索： | 200件 |
| ■EBER1検索： | 167件 |
| ■FISH法検索： | 82件 |
| ■病理解剖診断： | 26件 |

3) 病理診断精度管理について：

- ①気づきメモ：日常の業務の間に気づいたことを書きこむ「気づきメモ」用紙を準備、その都度、書き留めるようにしている。そこで出された内容は、医師と技師のリスクマネージャーと副技師長がすべてに目を通し、まとめて月1回の連絡会で情報共有している。
- ②医師・技師間情報共有：毎週金曜日の午前8：20から部長、副部長、副技師長、主任技師による連絡会を行ってその週の予定などの確認や問題点の抽出などを行い、さらに毎月第2週目の木曜日午後5：15からは部長、副部長と技師全員参加による病理診断部連絡会議を開き、検体の流れや業務環境の改善に関する検討などを行っている。その内、年一回は、各部門の業務実績報告会を行って、病理診断部全体の業務量やその動向などの情報を共有している。
- ③小手術検体や生検検体の検体処理および切り出し：病理医と臨床検査技師が相互に検体と検査申込書を確認しながら共同で行なっている。
- ④外科手術検体の検体処理と切り出し：手術室から届いた未固定検体は、病理医が全ての検体処理（必要最小限の割入れ、写真撮影、適切な貼り付け等の後のホルマリン固定など）を行っている。また、固定後検体の切り出しも、病理医が検査申込書を参照しながら全て

行っている。

- ⑤組織診断報告：全症例について、講師以上の認定病理専門医によるダブルチェック体制で行っている。
- ⑥免疫組織化学染色標本：担当技師と病理医が、毎日、その日のすべての標本について、染色の妥当性について評価した後で診断医に渡すようにしている。
- ⑦細胞診：スクリーナーによりダブルチェックを行い、少しでも異常所見のある標本（クラスⅡ以上）については全ての症例をスクリーナーと認定病理専門医とのディスカッションを経て、最終報告している。

4) 臨床病理カンファレンス

- 1) 剖検肉眼所見検討会：毎週水曜日午前9：00から、臨床担当医の参加のもと、剖検症例の肉眼所見の検討会を行っている。
- 2) 剖検症例総合検討会：毎月原則第2・第4水曜日の午後5：00より開催している。
- 3) 病院CPC（臨床病理カンファレンス）：卒後臨床研修センター主催で年3回ほど病院の全職員を対象とした剖検症例検討会が行われており、症例の選択、病理解剖所見の提示や討論で主要な役割を果たしている。
- 4) 放射線科・病理カンファレンス：隔週金曜日午後5：00から放射線科カンファレンス室で行っている。
- 5) 呼吸器内科カンファレンス：毎週火曜日午前8：00から、病理医が参加し、必要に応じて症例の病理像を解説している。
- 6) 消化器外科・内科・病理合同胆膵カンファレンス：毎月1回開催。
- 7) 乳腺カンファレンス：隔週、火曜日
- 8) 腎生検カンファレンス：隔週、月曜日

4. 研究業績（医師以外）

◎学会・研究会発表

1. 飛田野清美, 二階堂貴章, 本望一昌, 小瀬川順幸, 芳賀美子: IgAの沈着を呈したAlport症候群の一例. 第67回日本医学検査学会, 2018年5月12-13日, 静岡
2. 柳田美樹, 二階堂貴章, 郡 俊勝, 鈴木智子, 渡邊温子, 天野雄介, 大城 久, 福嶋敬宜: 中枢神経系原発と考えられ、その後他臓器浸潤がみられた悪性リンパ腫の一例. 第59回日本臨床細胞学会総会, 2018年6月1-3日, 北海道
3. 飛田野清美, 二階堂貴章, 本望一昌, 小瀬川順幸, 芳賀美子: 透過型電子顕微鏡検査の基礎と実際（腎生検検査の必須アイテム）. 第38回栃木県医学検査学会, 2018年10月21日, 栃木
4. 飛田野清美, 二階堂貴章, 本望一昌, 小瀬川順幸, 芳賀美子: 透過型電子顕微鏡で気管支線毛を観察し

たカルタゲナー症候群疑いの一例。第55回関甲信支部・首都圏支部医学検査学会，2018年10月27-28日，群馬

5. 小瀬川順幸，二階堂貴章，本望一昌，飛田野清美，芳賀美子：病理解剖室・臓器保管倉庫におけるホルマリン対策。第55回関甲信支部・首都圏支部医学検査学会，2018年10月27-28日，群馬

5. 2019年の目標・事業計画等

昨年は、7月に病理診断部が新館南棟に移設されたが、その前に、ワーキンググループ(WG)を立ち上げ、周到に移設の準備を進めて行ったため、大きな混乱はなく、業務を再開することができた。

今年もWGによる業務改善等を進めていく予定であり、まずWGの概要について示す。

WGは病理診断部内の組織横断的な技師のワーキンググループであり、各グループにはグループリーダー(副技師長、主任技師以外)と書記を置き、最初に明確な目標を定めてもらった。書記は毎回簡単な議事録を作成し、リーダーがメール添付で部長へ報告し、また毎月の連絡会で活動報告を行うこととした。3WGが扱う案件の概要は以下である。

Group A：病理診断部全体の業務改善、業務環境改善に関する案件を扱うグループ

Group B：病理診断部全体の技術・学術向上に関する案件を扱うグループ

Group C：病理診断部の社会性向上に関する案件を扱うグループ

1) 業務向上

今年、数年後の国際的な認証ISOの取得を目標として、それに向けた取り組み(物品管理台帳作成、毒劇物管理台帳作成、各種機器管理台帳作成、特殊染色の精度管理ほか)を一つ一つ行っていくことで、結果として業務向上(効率化、迅速化、質向上、安全性向上など)につながっていけばと良いと考えている。また、そのような中で、引き続き、5S活動の推進、毎月の気づきメモの振り返りや部内での情報共有など行っていく、インシデントが起これない作業手順の見直しなどインシデント防止策を考えていきたい。

2) 次世代自治病理プロジェクト

病理診断部の新館南棟への移設が、ここ数年の大きな関心であったが、それが完了した今年、新たな形で将来の病理診断の発展を皆で考えていく必要がある。ゲノム医療やデジタル病理の発展に当病理診断部が、どのように貢献していけるのか、課題は少なくないが、病理部門にとっては大きな発展期が来たと考え、様々なことを前に進めていきたい。

3) カンファレンスの充実

院内各診療科との臨床病理カンファレンスは、臨床各科への情報提供の機会であると同時に、臨床相関につい

ての考察、臨床科との良好な信頼関係の構築そして病理診断の精度向上のためにも重要であり、今後なるべく臨床科の要望には応えて行ける体制を考えていきたい。今年、早々に消化器内科肝臓グループとの臨床病理カンファレンスをスタートさせることとした(月1回の予定)。

4) 部内セミナーの充実

JICHI病理診断セミナーは外部講師を招聘し、標本の供覧と講演を行ってもらうものである。昨年、神経病理、病理診断学のあり方、肝臓病理などをテーマに行った。それぞれで、各関連臨床科からの出席もあり、今後も継続的に行っていくことで、病理診断レベルの向上に加え、臨床各科との診療連携の上でも非常に有益な企画/事業と考えており、継続していきたい。

5) 病理診断部からの情報発信

病理診断部からの部外への情報発信はホームページ、スタッフブログ、ニュースレター(PATHO News)によって行っている。ニュースレターは主に学内/院内の関係部署への病理診断業務についての情報提供を目的として行っており、本企画も関係科の方々の理解が得られるように今後も継続していく予定である。ホームページは全面的に見直し、4月に機能性を高めたものにリニューアルを予定している。

病理診断部/病理診断科 連絡先：

電話0285-58-7186、Fax 0285-44-8467

ウェブサイト：<http://www.jichi.ac.jp/pathology/>